

2次診療施設とJAMeC各種企画に関するアンケート(同封)にご協力ください。

無料進呈

指定医薬部外品
保湿成分配合
手指消毒剤
キビキビ®
1000mL(ポンプ式)



同封のアンケートにご協力ください。
先着1500件に、ポンプ式消毒剤1リットル10本(約2万円相当)を無料進呈致します。
手指消毒剤キビキビ 日本アルコール産業株式会社 1ケース(1Lポンプ×10本)
送料600円はご負担願います。製品に送料振り込み用紙を同封いたしますので恐れ入りますが、振込をお願いいたします。
締め切りは、3月31日(必着)とさせていただきます。ただし、先着1500病院に達し次第、締め切らせていただきます。

企業広告

今回は次の企業にご協力いただき、広告を掲載しています。広告費は本誌の編集・郵送費の一部にさせていただきます。連携病院向けに特別な優待をつけていただいておりますので、詳しくは、同封の広告をご覧ください。

1. サンリツ臨床検査受託サービス...初回検査料半額

サンリツ株式会社は、JAMeC内にプランチラボを持つ、血液検査センターです。JAMeCからの検体検査だけでなく、外部からの検体の依頼も郵送または回収によって受け付けております。サンリツ株式会社は、血液生化学検査だけでなく、細菌検査や病理検査、遺伝子検査も行っております。今回、連携病院には、通常料金の半額

で細菌検査・真菌検査を行います(ただし新規病院、初回1回のみ)です。お試しいただければ幸いです。

問い合わせ

サンリツ検査センター
047-487-2847まで

2. テナント料引き下げ支援...初回登録料無料

株式会社アクセスクリエイトでは、テナント料減額の支援をしています。病院などのテナント料が減額されることにより、資金繰りが改善され、新たな設備投資の原資に活用出来ます。家主様との関係は大切に致します。実績のある専門コンサルタントが担当致しますのでご安心ください。事前調査は無料、家賃



減額が実現しなければ、費用は一切必要ありません(完全成功報酬)。連携病院には、初回登録料を無料にいたします。

問い合わせ

株式会社アクセスクリエイト
0800-919-0007(フリーダイヤル)
家賃レスキューまで

3. ネットワークカメラ販売設置...初期設置サービス無料、機種特別割引

シェル リンクライフでは、動物病院での夜間や休業日など、院内の動物の様子を観察するため、あるいは、ペットオーナー様が家庭内の動物の様子を確認するための遠隔ネットワークカメラの導入を支援しております。音声やズーム機能のある便利なカメラです。連携病院および連携病院から



の紹介飼主様には、カメラ全機種の特別割引、手間のかかるネットワークカメラの初期設置無料などの特典をご用意しています。

問い合わせ

シェル リンクライフ
020-816-271
または
特別ホームページ
(http://shell-homeguard.jp/pet/jm_index.html)まで

編集 ●発行 人:小川博之
●編集 人:近藤昌弘
●編集 員:小野憲一郎・夏堀雅宏・松永悟・平尾秀博
●発行 日:2011年3月26日

●発行 所:日本動物高度医療センター
〒213-0032 神奈川県川崎市高津区久地2-5-8
TEL 044-850-1280 FAX 044-850-8123
URL <http://www.jarmec.jp>

この冊子はJAMeC連携病院の獣医師向けに配布している無料情報誌です

日本動物高度医療センターは「高度医療」「人材教育」「臨床研究」の3つの理念から動物医療を実践しています。

ジャーメック・ニュース



ご挨拶 「軌道」

昨年、小惑星探査機「はやぶさ」は閉塞感漂う日本に素晴らしい感動を与えてくれました。プロジェクトチーム一丸となって、多くの難問を克服し、この地球から、はるか遠く離れた「はやぶさ」を根気よく操作し続けました。その結果、みごと軌道を見失わず、貴重な情報を持ち帰ったニュースは、今も鮮明な記憶として残すところです。

日本動物高度医療センターは、開業以来4年半が経過し、その間、多くの方々のご支援により、ようやくいくつかの点で軌道に乗って参りました。

一点目は「診療」でございます。一人ひとりの技術が向上し、最近では、ご紹介頂いた病院から感謝のお言葉を頂くことも増えました。紹介病院と十分な連携をとり、飼い主と動物へ対応した結果であると喜んでおります。

二点目は「教育」でございます。当センターは2年間の研修プログラムや各種セミナーなど教育研修に多くの力を注いでまいりました。倫理性・社会性を持ち合わせた専門性の高い獣医師を育てることは、大変難しく、まだまだ十分ではございませんが、ようやく研修プログラムも軌道に乗り、一人前の獣医師として当センターや他の動物病院の勤務医として仕事ができる人材を育てる事が出来つつあります。また、農林水産省より小動物臨床研修施設の認定を頂き、獣医高度医療研修として多くの実習生を受け入れるようになってきました。「組織は

取締役 北村直人



獣医師・獣医学博士 社団法人日本獣医師会顧問・日本獣医生命科学大学客員教授・酪農学園大学獣医学部特任教授。昨年「日本における食の安全に関わる法制度構築の背景と獣医学及び獣医行政の役割について」のテーマで獣医学博士号を取得。

人なり」皆さんから称賛を浴びるような獣医師を育てることを目標に、引き続き教育に尽力してまいります。

三点目は「獣医療事業」でございます。広く2次診療サービスをご提供するには、採算性の良い治療だけに偏るわけにいかず、多額の施設投資と維持経費が必要となります。この事業性につきましても、多くの病院から症例をご紹介頂いたおかげで、症例数も増え、2次診療を中心とした獣医療事業として成り立つようになって参りました。継続的に事業が成り立ってはじめて皆さまに安心して満足頂ける獣医療をご提供することが出来、多額の設備投資を抱えながらも、法人として所定の税金等を納めることが出来るようになりました。さらには30名を超える獣医師を含め総勢75名に雇用の場を提供することを通して、社会に対して貢献が出来ているものと考えます。

まだまだ、足りない点、改善する点も多々ございますが、探査機「はやぶさ」にならい、「診療」「教育」「事業性」の軌道をしっかり保ち、国内あるいは小動物領域にとどまらず、海外や獣医療全般に貢献をしていきたいと考えます。引き続きご指導ご鞭撻のほど、宜しく願い申し上げます。

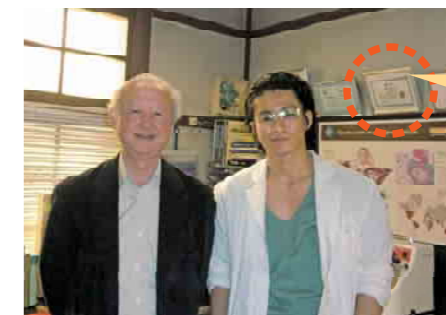
獣医ドリトルの獣医療監修を行いました

当センターは、昨年秋から放映されたTBSドラマ小栗旬主演「獣医ドリトル」の台本監修と技術指導を行って参りました。原作は漫画(作:夏緑/画:ちくまきよし)で、獣医版ブラックジャックの要素を持つ



ヒューマンドラマとなっています。フィクションですので獣医療・獣医界がただしく表現されていない部分もありますが、このドラマを通して一般の方が獣医療に関心を持っていただければと思います。動物医療分野の監修・技術指導を引き受けました。視聴率も高く、一般の方々、

獣医師の方々の反響も高く、お手伝いをさせていただいたがいがあり喜んでおります。



鳥取動物病院はJAMeCの連携病院でした。

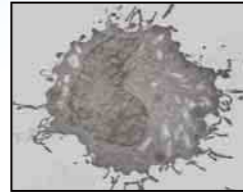
TBS録音スタジオにて左:小川センター長 右:主演の小栗旬さん

【2011年度 診療部門の特徴】

JARMeCの基本理念は、教育、臨床研究、そして高度医療の三つを掲げておりますが、今回は、JARMeCで行っている診療の特徴についてご案内いたします。ご紹介いただける症例については、それぞれの症例に対して担当制を引いてはありますが、治療方針等については、勤務医、医科長、院長副院長、センター長と組織全体で責任をもって、他の診療科との連携を取りチーム医療を実践しております。

腫瘍科

腫瘍科では、リンパ腫、腺癌、肥満細胞腫、扁平上皮癌、メラノーマに対して多く診察しています。これらの疾患に対して、当センターでは、外科的治療、化学療法、免疫療法、放射線治療の4つ治療法を単独または組み合わせて治療にあたっています。



活性化させた樹状細胞

専門領域として、抗がん剤の薬剤耐性と薬剤選択、鼻腔内腫瘍、リンパ腫、下垂体腫瘍に対する放射線治療、免疫療法(リンパ球活性化療法CAT、樹状細胞療法DCワクチン)や放射線併用療法(メラノーマ他)メラノーマの遺伝子変異解析、等を診療テーマとしています。

検査では、PET-CTの導入により、リンパ腫・線維肉腫・頭部腫瘍の疾患で、手術前の病巣の評価、再発評価、治療評価などを目的としたクリニカルPET、早期腫瘍を発見するためのスクリーニングPET(がん検診)を実施しています。

循環器 / 呼吸器科

循環器科では、心筋症、僧帽弁閉鎖不全症、肺高血圧症などの後天性心疾患や先天性心疾患、その他、貧血や血栓症例、呼吸器科では肺炎、気管虚脱や狭窄などの気管疾患を数多く診ています。特殊検査として、ホルター心電計、心エコー検査、心カテーテル検査、フラットパネルによるX線ビデオ評価、血液ガスモニターを実施し、症例に応じ、低侵襲性のインターベンション治療PDAに対するコイル塞栓術、肺動脈狭窄に対するバルーン拡張術、ペースメーカー設置、気管虚脱に対する気管内ステント術と外科治療(人工心肺装置を使った体外循環開心術)と内科治療を中心に治療に取り組んでいます。



体外循環開心術



手術室

消化器 / 泌尿器科

消化器科・泌尿器科では、肝炎、胆管閉塞、胆結石、門脈シャントなどの肝臓胆嚢疾患、蛋白漏出性腸症、直腸狭窄、腸炎、潰瘍、食道狭窄などを多く治療しています。泌尿器科では、腎尿路結石や、腎疾患(腎不全)膀胱疾患(膀胱炎、腫瘍)尿路疾患(尿道損傷・狭窄)前立腺疾患(前立腺腫瘍・肥大・周囲のう胞)子宮疾患(蓄膿症)会陰ヘルニアなどを診ています。検査においては、内視鏡検査を積極的に用いて、上部下部消化管の観察とバイオプシー、異物摘出、PEGの設置をしています。治療では、外科手術、内科治療に加え、食道拡張術、直腸拡張術などのバルーンカ

テーテルを用いたインターベンション(低侵襲治療)を実施しています。今後、硬性内視鏡、腹腔/胸腔鏡検査(肝/肺生検など)を取り入れていく予定です。



内視鏡

脳神経 / 整形外科

脳神経科では、「脳疾患」脊髄疾患などの神経症状に対し、神経学的検査、MRI検査、脳脊髄液検査、脊髄造影検査などの精密検査を行い診断します。特にMRIは静止磁場強度1.5Tで高画質な画像により診断能を高めています。てんかん重



MRI撮影と画像



前十字靭帯断裂へのTPLO

責や脳炎などに対する内科的治療に加え、外科手術については、椎間板ヘルニアに対する片側椎弓切除術やベントラルスロット術、環軸不安定症や脊椎骨折に対する椎体固定術、脳腫瘍に対する脳腫瘍摘出術、水頭症に対するV-Pシャント設置術など、ほとんどすべての外科的治療に対応可能です。

整形外科では、骨折や関節疾患に対してX線検査、CT検査、関節液検査等で診断しております。骨折に対するロッキングコンプレッションプレート(LCP)システムや前十字靭帯断裂に対するTPLOなどの最新技術を導入し、手術成績の向上を図っています。

脳神経、整形外科領域において、今後、幹細胞を用いた骨移植、再生医療の臨床応用テーマにも取り組んでいく予定です。

眼科

眼科では、細線灯顕微鏡(スリットランプ)、眼底カメラ、眼圧測定器、双眼倒像鏡、網膜電位図(ERG)などの特殊検査機器を用いて、白内障、緑内障、角膜潰瘍、PRAC(進行性網膜萎縮症)などの検査を行っています。治療は、内科治療に加え、眼科手術用顕微鏡を用いた角膜疾患、緑内障、白内障等の眼科手術を行っています。特に白内障は、時間の経過とともに緑



内障や網膜剥離に移行する可能性が高く、最新の機器を用いて早期に治療し視覚の回復を目指しています。その他、網膜剥離に対するレーザー治療の実施も今後予定しております。



白内障手術後の眼内レンズ

症例紹介 1 18症例の まとめ

犬食道内異物症例に対する治療

遠藤隼人(消化器科 勤務医)

はじめに

食道内異物は、食道の蠕動運動によっても食道を通過せず、食道内に異物が引っかかるもので、一般的に若齢小型犬に多くみられ、臨床症状としては、吐出、食欲不振、唾液過多などが認められます。食道内異物は、胃内異物、腸内異物に比べて遭遇する機会は多くはありませんが、発生した場合には急性の上部消化器症状を呈し、緊急的な対応が求められます。鑑別診断として巨大食道、食道狭窄との鑑別が必要となります。食道炎や穿孔を併発することもあり、合併症として食道狭窄、術創感染、誤嚥性肺炎などがあげられるため、異物を除去した後の予後管理も重要となってきます。

主訴

一般的に報告されている通り、今回の18例についても、急性の吐出、食欲不振、嚥下障害、唾液過多が認められました。穿孔が

診断

当センターでは、X線検査または内視鏡検査を用いて診断します。X線検査では誤嚥性肺炎や穿孔の有無に注意しながら造影剤を用いる場合もあります。巨大食道、食道炎、胸腔内腫瘍等と類症鑑別するために、また、異物の確認、診断後の異物除去も

治療

異物の除去は、まず内視鏡による胃内への押しこみ、または内視鏡による摘出を試みます。内視鏡による除去が困難と判断された場合は、開胸下での食道切開による摘出を行います。今回の18例では、内視鏡による胃内への押し込みが4例、摘出が3例、食道切開が7例でした。

予後管理

誤嚥性肺炎;嘔吐と異なり、食道内異物による吐出は、誤嚥性肺炎を引き起こす可能性が増大し、予後は極めて不良(死亡)となります。この誤嚥性肺炎を予防するために細心の注意が必要です。食道炎等からの食道狭窄を誘発されると、食欲不振等慢性消耗性疾患を併発するため、異物摘出後の食道内の粘膜の状況を見てPEG(胃ろうカテーテル)の設置を行います。18例のうち食道粘膜の障害が重度な12例にはPEGチューブの設置ならびに長期間の絶飲食管理を行い、良好な結果が得られています。狭窄が認められる場合はバルーン拡張術を行う必要もあります。

ご紹介いただく場合

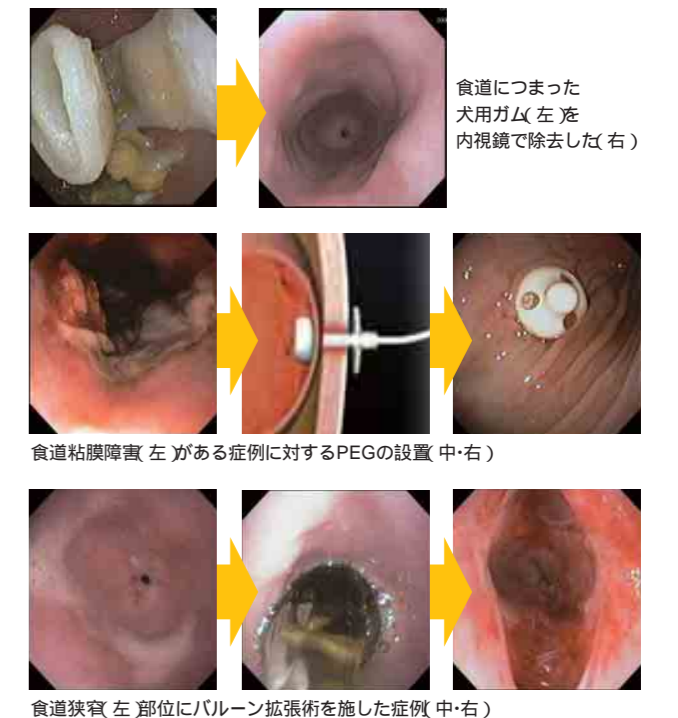
食道内異物は、発生から長期間が経過すると食道粘膜の糜爛、潰瘍、壊死を併発し、治療過程において食道穿孔、食道狭窄を起こしやすく、手術を実施した場合には縫合部の離開など

吐出・嘔吐の鑑別		
所見	吐出	嘔吐
特徴	食道、咽喉腔から食物やを排出する受動的動作	胃ときに上部十二指腸から食物、食物残渣、液体を排出する能動的動作
吐くまでの時間	数分~数時間	数分~数時間
吐物の性状	未消化物、粘液状液、泡沫状液などさまざま	未消化物、消化物
食事内容による悪化	ありうる(液体、ペースト、固形)	通常なし
前駆症状	なし	流涎、むかつき、おち着かない
吐く時の様子	努力なし 受動的	腹部収縮を伴う努力性 能動的
関連症状	呼吸困難、発咳	流涎、むかつき

今回、当センターで食道内異物と診断した犬18例について、その特徴、治療法と臨床経過を評価しました。異物の種類は犬用ガム(10例)が最も多く、次いで骨片や竹串などの鋭利な物(5例)、野菜や果物などの塊状物(3例)でした。

ある場合は呼吸困難も見られます。

考慮して、内視鏡検査を行って確定診断を行います。内視鏡検査による食道粘膜の観察、状態の把握が、処置や治療を選択する上で重要なポイントと考えています。



食道につまった犬用ガム(左)内視鏡で除去した(右)

食道粘膜障害(左)がある症例に対するPEGの設置(中・右)

食道狭窄(左)部位にバルーン拡張術を施した症例(中・右)

の重篤な合併症の併発につながります。内視鏡による検査、異物除去、PEGによる食事管理が必要と判断され、当センターにご紹介いただける際は、出来るだけ早くご相談ください。

JARMeCにおける胆嚢粘液嚢腫の治療方針

山崎寛文(消化器・泌尿器科 勤務医)

はじめに

胆嚢粘液嚢腫とは、胆嚢内に胆汁が鬱滞し粘稠性が増し流動性を失った状態(胆泥)をさします。無症状であることもありますが、嘔吐、食欲不振などの症状を引き起こします。特に、本症は、胆嚢破裂、胆嚢炎、胆管炎、胆管閉塞、膵炎・腸炎・肝炎などとの関連性が高く、総胆管の閉塞による黄疸や胆嚢破裂による腹部痛など重篤な症状を伴います。

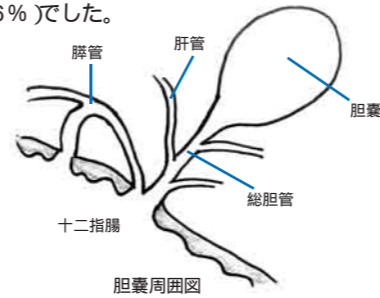
今回我々は胆嚢粘液嚢腫と診断し、肝外胆管閉塞および胆のう破裂が認められ、外科手術を実施した31症例を中心に、胆嚢粘液嚢腫症例の特徴および当センターでの手術適応基準と成績をご紹介します。



病態生理

胆嚢粘液嚢腫の発生の明確な要因は解明されておりませんが、膵炎と胆嚢の関連;膵炎、胆管炎、肝炎などから細菌感染などが胆嚢におよび胆汁の粘稠度が変化するとされています。クッシングや甲状腺機能低下など内分泌疾患との関連高脂血症との関連;コレステロールが高値になると胆汁の濃縮が高くなり、粘稠性が高くなる。家族性因子;M.シュナウザー、A.コッカースパニエル、シェルティなどが高発犬種とされています。今回は、シェルティ

が6頭(19%)と最も多く、A.コッカースパニエル、M.シュナウザーはそれぞれ2頭(6%)でした。



臨床症状

胆嚢粘液嚢腫だけでは無症状の場合もありますが、多くの場合、胆嚢炎、(肝外)胆管炎、(総)胆管閉塞、胆嚢破裂が併発しており、これに関連した嘔吐、食欲不振、黄疸が臨床症状が見られま

す。今回、全例(100%)で嘔吐・食欲不振の臨床症状を示し、黄疸(51%)、上腹部痛(42%)を示していました。

類症鑑別および関連する疾患

胆嚢結石、腫瘍、肝疾患などとの類症鑑別が必要です。

検査および確定診断

胆嚢粘液嚢腫は、エコー検査により確定診断を行います。その他類症鑑別や併発疾患を検査する目的で、血液検査、レントゲン検査を行います。

・エコー検査;胆嚢粘液嚢腫の特徴的画像(星状・キウイフルーツパターン)と胆嚢内内容物の流動性を確認します。キウイフルーツパターンはすべての症例で見られました。流動性はありませんでした。今回はこれに加え、胆嚢破裂もしくは胆嚢周囲の腹膜炎を示唆する所見(胆嚢周囲エコーレベル上昇など14例・45%)、総胆管の閉塞所見(総胆管の重度拡張など5例・16%)が見られました。

血液検査;一般的には、ALP、GGT(>15U/L)、ALT、AST、Bil(>0.5mg/dl)、WBC(>18,000/μL)、CRP(>1.0mg/dl)などの上昇が認められます。今回の症例では、ALPの上昇

(97%)、ビリルビンの上昇(80%)、GGT上昇(80%)、WBC上昇(51%)、CRP上昇(58%)が認められました。また、犬膵特異的リパーゼ酵素活性を測定した結果、9例(29%)の症例で膵炎を疑う値(>200 μg/L)を示しました。レントゲン検査;胆嚢破裂を伴っている場合は上腹部のディテールが低下する傾向にありますが、それ以外では特徴的所見はありません。



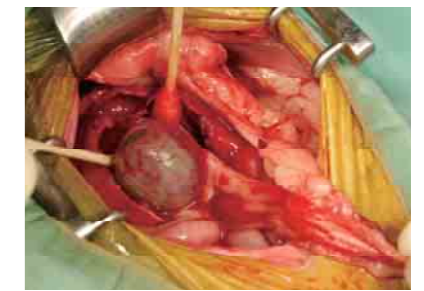
外科的治療方針

一般症状、血液検査、エコー、X線検査により、胆嚢粘液嚢腫と診断された場合、50-60%の割合で胆嚢破裂を起こすと報告されており、胆嚢破裂を発症すると予後が極めて悪くなるので、外科手術をご提案しています。特に以下の場合には、早期の対応を行っております。

胆嚢破裂:炎症性の腹水を認める(腹膜炎)、エコー検査で胆嚢周囲の炎症を認める。
肝外胆管閉塞:ビリルビンの上昇を認める場合、もしくは過去にビリルビンの上昇を認めた場合。エコー検査で総胆管の格調を認めた場合。

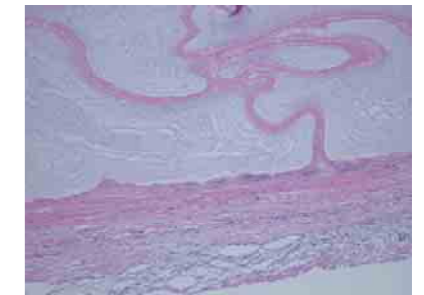
外科的演技

一般的に胆嚢破裂を伴っている胆嚢粘液嚢腫の場合、癒着などによりアプローチが困難ですが、超音波外科用手術吸引器であるソノベットの超音波メスの使用により低侵襲な胆嚢摘出を行っています。また、総胆管疎通確認のため、4-7Fr栄養カテーテルを用いての胆嚢から十二指腸までの疎通確認をし、同時に胆嚢内容物の細菌感受性検査、肝臓バイオプシーを行い、術後の治療の方向性を決定しています。



胆嚢摘出を行った外科治療成績

当センターにて胆嚢粘液嚢腫と診断し、胆嚢摘出を行った犬31症例の治療成績は、予後良好;29頭(93.5%)と高い成績を示しました。術後29症例でビリルビンの低下をみとめ一般状態の改善が認められています。予後不良;2頭(術後胆汁性腹膜炎改善なく死亡1頭、術後膵炎の悪化により再度高ビリルビン血症となり死亡1頭)術後の病理組織検査では、26症例が胆嚢壊死と診断された。



ご紹介いただく場合

今回の胆嚢粘液嚢腫31例には、膵炎、肝炎、総胆管閉塞など他の疾患も併発しているにもかかわらず、高い治療成績が得られたと考え、当センターでの治療方針の確認ができました。今回の病理組織検査により、そのほとんどが胆嚢壊死を起こしていたため、内科療法で一時的に症状が改善したとしても胆嚢破裂

を引き起こし、胆汁性腹膜炎に陥る可能性が高いと思われます。今後は無症候であっても胆嚢摘出術の検討をしていきたいと思えます。嘔吐や食欲不振を主訴とし、膵炎・肝炎・胆管疾患を疑う場合、エコー検査で胆嚢粘液嚢腫の有無を確認していただき、必要に応じ、ご相談、ご紹介いただきますようお願いいたします。

獣医師・動物看護師

募集

【職種:勤務医(常勤)】

応募資格:臨床経験3年以上、循環器科、呼吸器科、泌尿生殖器科、消化器科、麻酔科などの専門領域に関心のある獣医師
給与:月25万円~70万円(経験・能力に応じて)

【職種:動物看護師(常勤) 急募】

応募資格:動物看護師としての勤務経験1年以上
給与:月17.5万円~(経験・能力に応じて)
休日:週休2日制、夏季冬季休暇、有給休暇他、 保険:各種社会保険完備(健保、厚生、雇用、労災)
手当:交通費、宿直手当、他、昇給・昇格:獣医師職、動物看護師職/人事・評価制度による

日本動物高度医療センター 事務局/玉越(タマコシ)
Tel: 044-850-1320 E-mail: recruit@jarmec.jp

お気軽に
お問い合わせ下さい。

症例紹介 3

15症例のまとめ

犬消化器型リンパ腫に対する化学療法 (CCNU) の治療効果

山下傑夫 (腫瘍科 勤務医)

はじめに

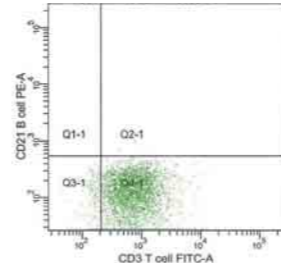
リンパ腫は、犬でもっとも一般的な悪性腫瘍性疾患であり、犬の消化器型リンパ腫は、多中心型リンパ腫について良く遭遇する疾患です。消化器型リンパ腫は、胃、小腸、大腸といった消化管、また腸間膜リンパ節や肝臓など消化器系臓器を原発としています。犬のリンパ腫に対する化学療法は、多剤併用療法が一般的ですが、消化器型リンパ腫での奏効率は低く長期寛解が得られないことが多く、なかでもT細胞型はB細胞型よりも予後が悪いことが知られていま

犬リンパ腫
 ・多中心型リンパ腫 (リンパ腫全体の約80%)
 ・消化器型リンパ腫 (リンパ腫全体の約7%)
 (免疫型で分類すると、
 B細胞型 (消化器型リンパ腫全体の約12%)
 T細胞型 (78%)
 nonT/nonB細胞型 (10%)

す。T細胞型には一般的な治療であるCHOP (シクロホスファミド・ドキシソリン・ビンクリスチン・プレドニゾン) を基本とした多剤併用化学療法が奏功しにくいと報告されています。

今回、画像検査および細胞診により消化器型ハイグレードリンパ腫と診断され、フローサイトメトリー検査にてT細胞系あるいはnon T non B細胞系に分類された15症例の犬に対し、CCNU (ロムスチン、日本未発売) による化学療法を実施しました。

フローサイトメトリー検査



症例

犬種はゴールデンレトリバー3例、シーズー3例、柴犬3例、雑種3例、その他犬種3例で、平均年齢8歳 (3-12歳)、性別は雄9例 (去勢雄3例)、雌6例 (避妊雌4例) 平均体重8.7kg (4.0-26.7kg) でした。臨床徴候として、嘔吐、下痢、血便と消化器症状が多くの症例で認められていました。発生部位は、小腸あるいは大腸の消化管に病変が確認されたものが11例、肝臓や腸間膜リンパ節が主病変として確認されたものが4例でした。ステージ は1例、 は3例、 は9例 (未分類2例) であり、サブステージはすべてbでした。表面マーカー検索ではT細胞系が11例であり、non T non B 細胞系が4例でした。

リンパ腫の病期の特徴

- ・ステージ分類
 - 単独のリンパ節
 - 複数領域のリンパ節
 - 全身のリンパ節
 - 肝臓・脾臓を含む
 - 骨髄・血液・非リンパ節器官を含む
- ・サブステージ
 - a 臨床兆候が見られない
 - b 明らかな臨床兆候が見られる

治療

CCNUの初回平均投与量は60mg/m² (41-73mg/m²) で、投与間隔は3週間を基本としました。有害反応 (好中球減少、肝酵素上昇) を観察しながら2回目以降の投与量を調節しまし

た。全例でプレドニゾン、12例でL-アスパラギナーゼを併用しました。

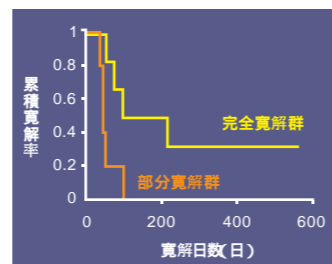
治療成績

完全寛解 (がんの徴候がすべて消失) は6例、部分寛解 (腫瘍の大きさが減少) は6例であり治療効果 (反応率) は80%と多剤併用化学療法 (文献*) よりも良好な治療成績を得ることができました。全体の中央生存期間は52日 (10-549日+) でしたが、

完全寛解に至った6例の寛解期間の中央値は152日間 (48-549日+) であり、うち2例は1年以上経過した現在も完全寛解が維持されており。

報告者 (年)	症例数 (T/B)	治療	発効率 (%)		生存期間中央値 (日)	
			全体	T細胞 (CR率)	全体	T細胞型 / nonTnonB細胞型
Rassnick (2009)	18 (10/6)	多剤併用 (VELCAP-SC)	56	30 (30)	77	22 (0-103)
本研究	15 (11/-)	CCNU (pre ± L-ASP)	80	90 (45)	52	82 (39-549+) / 29 (10-130)

参考文献 * Rassnick 2009



ご紹介いただく場合

今回の成績より、CCNUによる化学療法は、犬の消化器型T細胞性/non T non B細胞性リンパ腫に対する有効なひとつの手段として用いられることが示唆されました。本治療は必

ずしも第一選択治療法ではありませんが、他の治療法も考慮しながら治療方針をたてていきます。

Information

JARMeCでのセミナーの開催

セミナーへの参加申し込みは、従来通りホームページ (http://www.jarmec.jp) からお申し込みください。

- 腫瘍科セミナー (廉澤剛先生) 月1回開催しています。
- 放射線科カンファレンス (夏堀雅宏) 月1回開催しています。
- JARMEC談話会
- 第3回 2010年11月29日 終了
 - 「PET-CTの情報を使いこなす (夏堀雅宏)
 - (1) 犬の食道内異物の特徴とその対応 (遠藤隼人)
 - (2) 術前放射線照射への取り組み (菅井匡人)
- 第4回 2011年1月31日 終了
 - 「超伝導型1.5TMR (ECHELON Vega) を導入して」 (松永悟)
 - (1) 犬の髄膜腫について (稲垣武彦)
 - (2) JARMeCにおける眼科診療 (村松勇一郎)
- 第5回 (3月28日)
 - 「循環器疾患について (平尾秀博)
 - (1) 陰陰ヘルニアの考え方 (山崎寛文)
 - (2) 口腔内腫瘍の考え方 (富永牧子)

- 海外講師講演 (2月10日) 終了
- 「尿石症に関する新しい試み (テネシー大学 Joseph W. Bartges先生)
- 口蹄疫セミナー (2月21日) 終了
 - (1) 口蹄疫発生現場から (宮崎大 後藤義孝先生)
 - (2) 2010年口蹄疫その壮絶な現場防疫業務の実際 (宮崎大 末吉益雄先生)
- 高度医療セミナー (2月28日)
 - 「動物における遺伝性疾患検査への取組」 終了 (家畜改良事業団 塗本雅信先生、清水一広先生)
 - 外科研修会 (けやき臨床研究会主催予定) 参加費1回1万円。手術のDVDを見ながら解説します。詳しくはホームページでお知らせします。
- 第1回 — 6月5日 19:00 ~ : 胆嚢切除術
- 第2回 — 8月7日 19:00 ~ : 椎間板ヘルニアに対する椎弓切除術
- 第3回 — 12月4日 19:00 ~ : 前立腺腫瘍に対する大網被覆術
- 第4回 — 2012年2月5日 : 未定

講師派遣について

地域のセミナーへの講師派遣も承ります。電話044-850-1320までお問い合わせください。

画像遠隔診断サービスを開始いたします。ご関心のある方は同封のアンケート用紙にご記入の上、返信ください。

今春より画像遠隔診断サービスを開始いたします。X線・MRI・CTの読影を中心に、当センターの放射線科が、独自の報告書フォーマットを用い、夏堀院長が中心となり、獣医師数名がチームとして、通常24時間以内の診断サポート (一部緊急時に対応可能) を行います。有償の会員制とします。ご関心のある方は、アンケート用紙にご記入の上、返信ください。

夏堀雅宏 獣医学博士、東京農工大学卒、岐阜大学連合大学院修了、元北里大学専任講師。現在、日本放射線学会、日本獣医画像診断学会、日本放射線腫瘍学会など所属。当センター院長、放射線科科長、各大学の非常勤講師を務める。



JARMeC業績発表 2010年10月~2011年3月

青森県獣医師会講習会 (10/17)

- ・X線読影セミナー (夏堀)

動物臨床医学会 (11/19-21 大阪)

- ・食道内異物の犬18例 (遠藤)
- ・フラットパネル検出器 (FPD) によるパルス撮影の臨床応用 (夏堀)
- ・巨大気腫性肺嚢胞に対して肺葉切除を実施した犬の1例 (岩本)
- ・若齢犬に認められた下顎の扁平上皮癌の1例 (岡野)
- ・放射線治療を実施した扁平上皮癌の1例 (坂大)
- ・低線量分割照射に良好に反応した巨大転移性精上皮腫の犬の1例 (菅井)
- ・肺腺癌切除後に認められた癌性胸膜炎に対してカルボプラチンが著効した犬の1例 (富永)
- ・水晶体の前方亜脱臼に対してPEAを実施した猫の1例 (福島)
- ・パネルディスカッション; 不明の発熱を診断する 3 髄膜炎の診断治療 (松永)

湘南獣医師会講習会 (12/5)

- ・嘔吐と吐出からみた消化器疾患 (遠藤)

日本獣医がん学会 (1/22-23大阪)

- ・腫瘍認定医が知っておくべきFDG-PETの知識と臨床応用 (夏堀)
- ・イヌの副腎悪性末梢神経鞘腫瘍の1例 (市川)

日本獣医師会・高度医療に関するセミナー (1/23 京都)

- ・脊椎・脊髄疾患の診断と治療 (松永)

獣医3学会年次大会 (2/11-13岐阜)

- ・一般臨床医が知っておくべきがん診療シリーズ X線, CT, MRI, PET-CT (夏堀)

JCVIM・臨床病理・皮膚科学会 (3/11-13横浜)

- ・犬の肺ヘルニア18症例の回顧的研究 (坂大)
- ・JCVIM教育講演・肥満細胞腫に対する分子標的療法の展開・イマチニブによる治療の実際 (富永)

- ・健康犬5頭における18F-FDGの体内動態にもとづくPET-CT撮像適期の検討 (福田)

- ・比較眼科学会・猫角膜移植の1例 (村松)
- ・比較眼科学会・犬水晶体脱臼の回顧100例 (各務)

広島県獣医師会講習会 (3/13 福山)

- ・X線読影セミナー (夏堀)